

哲學研究

第五十六號

第五卷
第十一冊

近代勞働者階級の哲學思潮

米田庄太郎

一

夫れ近代勞働者階級とは、先づ其の法律上自由を有する點に於て奴隸や隸農と異なり、次に其の業務を獨立に行なふに必要な資本を所有しない點に於て總ての種類の企業家より區別せられ、次に働かずとも其の所得によりて獨立なる生活を營むに足る財産を有しない點に於て資産者と違ひ、而して自由契約によりて、他人に呈供する自己の勞働に對する報酬即ち賃銀を受け、之を唯一の生活資源、或は少くも之を最とも根本的なる生活資源として、獨立なる生活を營む人々を總括する一階級である。

かゝる社會階級の發生するには、先づ國民一般の法律上の自由、或は法律上の平等

が認められることが一の根本條件にして、夫れが認められない以上は、此の社會階級は到底發生し得ないのである。而して法律上の自由を國民一般に認めると云ふは、近世國家の一特徴であるから、此の方面より見るも、今日勞働者階級と稱せらるゝものは、一の近世的產物であることは明白である。要するに國民一般に法律上の自由が認められて居るが爲めに、一人が他の私人を自己の目的の爲めに使用するには、自由契約によらねばならない事が、近代勞働者の生起する一の根本條件である。而して一方に於ては、資産の簡人的集中が行はれると共に、他方に於ては此の如き自由なる勞働者が起り、更に大量需要が發達するとによりて、茲に近代資本主義が發生して來たのであるが、此の近代資本主義なるものは、營利主義と經濟的合理主義とを其の根本精神となすものにして、之れによりて法律上自由にして、全く或は主として賃銀によりて生活する勞働者即ち近代勞働者が大に増加して來たのである。されば近代勞働者は一方に於ては近代資本主義の發生する根本的一條件であると同時に、又近代資本主義の大なる發達によりて、始めて重要な一社會階級となつたのである。

營利主義及び經濟的合理主義を根本精神とする近代資本主義組織の下に於ては、

資本主義的企業家は種々なる事情によりて、先づ労働者を酷使することを以て、營利の目的を達する根本的の一方針とした。即ち出来るだけ労働者に與ふる賃銀を安くし、又出来るだけ日々働かせる時間を長くし、更に諸般の労働條件を出来るだけ費用のかゝらぬ様に處置することを營利の根本的の一方針とした。此くて歐米の何れの國に付て見るも、資本主義の發達の早代にありては、労働者の物質的生活状態は甚だ悲惨を極めて居る。而して此の如き物質的生活の墜落に伴なふて、又精神的生活も墜落した。

併し早代の近代労働者の精神的生活の墜落の原因として、吾人が更に注意す可き重大なる事情がある。夫れは早代の近代労働者の大部分は先祖代々住み慣れた村落を去り、傳來の職業を捨て、都市に集中し、而して全く新しき環境に入りて新しき職業に従事する人々であつたと云ふことである。此の事情は從來彼等の生活の精神的支柱であつた倫理的及び宗教的傳説を全く彼等の心から消滅させた。彼等は或意味に於ては傳來の思想や感情や慣習などの束縛から解放されて、精神上自由な人となつたのである。併しとり去られたる古き精神的內容に代つて、彼等の心を充たす可き新しき精神的內容は與へられなかつた。是れ彼等の投げ込まれた新しき

環境は、只混亂を極めて居るだけでまだ何等の精神的内容をも産出して居なかつたからである。而して彼等がかゝる状態の下にありては、其の僅かな餘暇を酒色や賭博に費やしたのである。要するに早代の近代労働者は、物質的にも亦精神的にも、實に墮落の極に陥つて居つたと云ひ得られるのである。然らば彼等がかゝる状態よりして如何にして覺醒したか。

—

近代労働者の精神的覺醒の過程を研究することは、甚だ興味ある又重要な一問題であるが、余は茲に之を論述する暇はないから、只簡單に一言するに止めて置く。夫れ近代労働者の精神的發動は、先づ己を酷使する箇人的僱主に對する怨恨として現はれ、而して暴力を以て僱主に復讐せんとすることが其の運動の初めであつた。併し夫れは單に箇人的労働者が箇人的僱主に對して抱ける怨恨、及び成せる行動にして、労働者の團結的行動でなかつたから、まだ之を労働者の運動と稱することは出來ない。而して同一の僱主に對して同様の怨恨を抱ける幾多の労働者が相集りて暴行を加へるに至つて、稍々労働運動の形を見へて來たが、併し夫れも無計畫的、無組

織的で、而して一時的な突發的な盲動に過ぎなかつたから、尙ほ嚴密に勞働運動と稱することは出来ない。而して彼等の間に組織的な計畫的な運動が發生するには、先づ彼等の精神が或程度の發達に達することが必要であつたが、夫れには人道主義の資本家や、彼等に同情し、更に進んで彼等と同化する智識階級の人々の現はれることが必要であつた。若し然らずば近代勞働者階級は今日見るが如き精神的發達を成すことは、到底出來なかつたであらうと思はれる。

併し初めは勞働者に同情し、彼等の生活の改造を圖らんとする智識階級の運動はあまり有效でなかつた。是れ兩者の間に完全なる理解は成立し難い實狀であつたからである。勞働者階級は智識階級の思想をよく理解し得ないと、同時に、智識階級もまた勞働者階級の潛勢力を觀破することが出來ず、只憐れなる勞働者を救濟するぐらいの考へで居たからである。而して智識階級の中に、近代勞働者の潛勢力、即ち將來の社會改造の原動力となる力の近代勞働者階級の中に潛在することを觀破し、己れを彼等と同化して考へ、又彼等の間に入りて彼等と共に運動に參加しつゝ、彼等を教育するものが起るに至つて、茲に兩者の了解ができ、勞働者は智識階級の説に心から耳を傾けて來た。此くて彼等の知力は發達し、理性は覺醒して來た。

三

然るに今労働者階級の眞の勢力を理解し、己を彼等と同化して考へ、彼等の運動を指導しつゝ、彼等を教育したる智識階級の人々の中にて、最も勢力を振ふたのはカール・マルクス及び彼の一派の人々であつた。而してマルクス一派は唯物主義を奉じ、其の社會主義は歴史的には唯物主義に基づいて立てられたるものではないにしても、少くも理論的には唯物主義によりて説明せられ、辯護されて居るものである。此くて近代労働者階級間に發達せる最初の哲學は、唯物主義哲學であつたのである。要するに近代労働者階級は哲學的には先づ唯物主義的に覺醒したのである。而してマルクスの時代は現代哲學史上唯物主義哲學が最も勢力を振ふた時代であつたことは、労働者階級をして、之を以て彼等特有の哲學と信ぜしめる上に、少なからぬ影響を及ぼしたものと思はれる。彼等は遂に唯心主義哲學を以てブールジョア階級特有の哲學と認めると共に、唯物主義哲學を以て彼等の階級特有の哲學と確信するに至つたのである。

尙ほ吾人は近代労働者階級が哲學的には先づ唯物主義的に覺醒せることは、嘗に

マルクス一派の影響によるばかりでなく、其の外にも種々なる原因があると考へるのである。茲に一々詳しく論述して居る暇はないから、是れも其の最とも重要と思はるゝものに付て、極簡單に一言するに止めて置くが、先づ第一には近代資本主義は科學的技術を以て其の發達の最とも重要な一因素となすものである。されば近代資本主義的經營の下に日々働く労働者は、自から科學的精神に感化されて、彼等の精神は科學的、合理主義的になつて來たのである。而して彼等は自然にも人生にも神秘的要素の存在するを認めず、總てが合理主義的に説明し得られるものと信ずるに至つた。尙ほ此の合理主義的傾向は彼等の反教會的態度が反宗教的態度に轉化することによりて大に強められた。而して近世合理主義の發達の歴史の示す如く科學の發達に伴ふ合理主義哲學は、あのづから唯物主義に進む傾向があると思はれるから、近代労働者階級間に先づ發達せる合理主義的傾向も、科學的文明の影響によりてあのづから唯物主義的になつて來たと推測される。殊に此の場合に直接にマルクス派の影響を受くるに於ては、彼等の間に唯物主義哲學の大に發達して來たのは、自然の勢ひであると思はれる。

次に近代労働者階級は傳來のブルジョアの及び貴族的理想を排斥することに

よりに、遂に理想主義其物を排斥するに至つたと思はれる。彼等は傳來の理想を排斥すると同時に、理想主義其物の本質をよく理解して、新しき理想を立てるには、まだ其の精神的發達は、あまりに幼稚であつた。而して唯物主義的立場より必然的に器械的に到達されると認めらるゝ結果を人生の目的と見ることは、彼等の當時の知力の發達程度に於て、比較的によく理解し得られる思想であつた。此くて彼等は理想主義を排斥して唯物主義を奉ずるに至つたのである。要するに近代勞働者は傳來の理想其の物を排斥すること、近代唯物主義的哲學思想が彼等の漸くに發達せる哲學的思考力の程度に於て比較的によく、理解し得られたことによりて、先づ唯物主義を、奉ずるに至つたのである。右の説述はあまりに簡單にして、余の考へを十分に云ひ表はして居らぬかと思ふが、茲に詳しく述ぶる暇はないから、他日機會を得れば改めて詳論することとする。

四

却説大體上前節に於て、述べしが如き理由によりて、近代勞働者階級の哲學的思想は、唯物主義的に發達して來たのであるが、然るに第十九世紀の終り頃に至つて、種々

なる事情は近代労働者階級の哲學的思潮を唯物主義的より唯心主義的に轉化させて來たのである。茲に其等の事情を詳しく述ぶる暇はないから、其の中の殊に重要なものに付て、矢張り極簡單に述べて置く。

今晩近に至つて近代労働者階級の哲學的思潮が、唯物主義的より唯心主義的に轉化し來れる根源も、矢張り彼等を指導する智識階級の人々に於ける思潮の變動にある。即ち其等の人々が唯物主義的哲學思想に疑ひを起し、而して唯心主義的哲學思想に耳を傾け、以て社會思想の改造或は新發展を試みんとする傾向を發達させて來たことが、即ち近代労働者階級に於ける哲學思潮の變動の根源である。そこで吾人は此の變動の原因を其等の智識階級の人々に付て探究しなければならぬのである。然らば其等の智識階級の人々は、如何なる原因によつて其の哲學的思潮を變動させて來たのであるか。茲に其の殊に重要と思はるゝものを擧ぐれば、

- (1) 唯物主義を基礎とする社會思想の理論的行き詰り。但し此の行き詰りを感ずるだけ、哲學的思惟を働かせない人々、或は働かさない人々は、今尚ほ唯物主義を固持して居る。

(2) 唯物主義を基礎とする社會運動の實際的行き詰り。今日之を意識して理想

主義に根據を求めんとする人々と、不知不識に理想主義を加味する人々とがある。

(3) 軌近の哲學的思想界に於て新理想主義が勃興し來りて、唯物主義の基礎を破壊し、而して軌近の思想界の背景を作るものは、マールクスの時代とは異りて、唯物主義ではなく、唯心主義となつて來たこと。

右の事項に付ては、余は拙著「軌近社會思想の研究」上卷中に詳しく論述して居るから、茲には論述を省いて置く。尙ほ余が最近に公にせる同書上卷別冊「新理想主義の歴史哲學」を合せて參考に供せられたい。

終りに新理想主義によりて労働者階級の哲學的思想を改造せんとする人々が、從來の如く理想主義を以てブルジョア階級の哲學となし、唯物主義を以て労働者階級の哲學となす思想を顛倒して、唯物主義を以てブルジョア階級の哲學となし、新理想主義を以て労働者階級の哲學となさんとする理由を少しく考へて見るに、要するに現代ブルジョア階級の實際的生活は全く唯物主義的ものにして、唯物主義的近代文明はブルジョア階級の文明である。資本主義的精神は唯物主義の最も深い表出である。之れに反して労働者階級は舊理想主義の如き、現實を離れた貴族

的な理想主義は勿論承認することは出来ないが、併し現實に即して現實に囚はれず、現實を突破して現實を改造せんとする新理想主義こそ、實に勞働者階級の哲學である可きである。勞働者階級の實際的生活は現實に即して、而も理想に生きるものである。若し勞働者階級より理想をとると去れば、彼等の生活に残る處は何物もない。貧弱なる物質的生活は人間の生活と稱するに足るほどのものでない。ブルジョア階級は物質に囚はれて物質に生きて居るか、勞働者階級は囚はれるだけの物質は有しないから、物質に即して而も理想に生きて居るのである。若し然らずば、彼等は生きる途を有しないのである。而して彼等は、物質に囚はれるのでなく、之を捕へて益々理想に生きんとするものである。余は近代勞働者階級の哲學的思想は此の如くに發達するに至つて、始めて、近代勞働者階級の運動は將來の新文化の發達に對して甚だ重大なる意義を有するものとなるかと考へるのである。(大正九年十月五日寸暇を盗んで本論文を書く。)